
仮面ライダーエターナル《死後の世界の赤き永遠》

エターナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエターナル《死後の世界の赤き永遠》

【Nコード】

N3104W

【作者名】

エターナル

【あらすじ】

目が覚めた時には、学園にいた。

そこには、天使と呼ばれていた少女がいた。

そして俺の手には、力があつた。

一本のメモリが……

PROLOGUE (前書き)

仮面ライダーリユウガに変わって連載させました！
仮面ライダーエターナル《死後の世界の赤き永遠》！

今回はプロローグです！

PROLOGUE

目を覚ました。

空を見上げていて、そこには点々と星が煌めく。

ほんのりと寒気が混じった風の音

「……ここ……は……？」

上半身を起こして辺りを見回した。

人の気配をあまり感じないが、学校の様だ…

今は夜……

ふと、自分の右手を見た。

俺の右手には小さめのアタッシュケースのクリップが握られていた。

俺は立って辺りを見る。

「なにをしてるの？」

後ろから声が聞こえて、振り返るとそこには、銀髪で金色の目をした少女がいた。

「もう消灯時間はとくに過ぎてるわ」

少女は俺に言ってきた。

俺は何がなんだか分からなかった。

「えーっと…俺、気が付いたらここにいたんだけど…」

「そう…貴方は新入生ね。名前は？」

名前を聞かれた。アレ？名前以外が思い出せない。なんでだ？

「竜堂…竜堂カツミ」

「竜堂君ね。よろしく。私は立華奏」

立華奏か…良い名前だな。

「あ、ああ。よろしく。えーっと…奏って呼んでもいいか？」

「貴方がそうしたければどうぞ」

「そうか。よろしくな奏」

これが俺、竜堂カツミと立華奏の出会いであった。

PROLOGUE (後書き)

次回は恐らく変身します。

最初のドーパントも決まっています。

次回をお楽しみに！

感想も待っています！

1 ETERNAL（前書き）

ANGEL BEATSの時系列はアニメ二話の後です。

今回はオリジナルドーパントが登場します。
そしてカツミ初変身です。

1 ETERNAL

奏と寮に向かう途中、奏に色々話を聞いた。

「つまり、ここは死後の世界ってところか？」

「そう」

そう。ここは死後の世界。死んだ人間が訪れる世界のような。つまり俺も死んだってことだな…

なんでか死んだという実感がある。

などと考えていると男子寮に着いた。

「ここが男子寮よ」

「ここがか。ありがとう奏。案内してくれて」

「別に私は当たり前のことをしただけよ」

奏は無表情だが、その顔は照れてるように見えた。

「明日は学校だから来てね」

「お、おお…」

そう言って奏は去っていった。

*

俺は男子寮の部屋に着き、先ず気になったのが、目覚めた時に手元にあったアタッシユケースだった。

「さっそく開けてみるか…」

そう言つて俺はアタッシユケースの中身を開けた。
そこには、L字型の赤いバツクルと、白いUSBメモリだった。
だが、そのUSBメモリは普通のUSBメモリにしては少し大きく、中心には『E』というイニシャルが描かれている。

「…なんだこりゃ？」

そう思いながら白いメモリに触れた。
その時、電流が走った。

【ETERNAL】

突然メモリから電子音がした。

（なんだ…？俺は…このメモリを知っている？）

そう思いながら、一端俺はアタッシユケースを閉じた。

（とりあえず寝るか…）

俺はベッドに入り、眠りについた。

*

「……き…なさい…お…き…なさい」

誰かが俺を起こしに来たようだ。奏か？

「起きなさい！」

突然怒鳴り声がして、俺は起き上がった。そこにいたのは、朱色の髪の子だった。しかし、服装が奏のとは違っていた。

「ちょっと来てもらっわよ」

いきなり何だ？この女は…

「ちよっ…」

「日向君、音無君」

後ろにいる青い髪が特徴の少年と赤みのかかった髪の少年が俺を取り押さえた。

「許せ」

「悪い」

「いや、謝るなら離せよ！」

俺が二人から離れようとした瞬間、

『キヤアアアアア！！！！』

悲鳴が聞こえた。

「今のは！？」

赤みのかかった髪の少年が窓を開けて外を見た。

そこには、青い髪の少女が、化け物に襲われていた。
その怪物は見た目はイルカに似た怪物だった。

「オイ、あれガルデモの入江じゃねえか！？」

「マズいわ！日向君！注意をこっちに引くわ！音無君はその間に彼女を！」

「わかった！」

「了解！」

音無と呼ばれた少年と日向と呼ばれた少年は頷いた。
俺は一瞬頭をよぎった。

アレは普通じゃ勝てない…と。

音無は部屋から出て、少女と日向は銃を構え、イルカの怪物に撃った。

だが、イルカの怪物はびくともしなかった。

「何よ、あの化け物は!？」

「どうするゆりっぺ？」

日向は少女に尋ねるが、少女は舌打ちをして、考えていた。

俺はアタッシュケースに目を向けた。

何故だか…あれならあの怪物を倒せるんじゃないかと…

(でもどうやって…)

その時、また頭に何かがよぎった。

これで戦う方法が…

俺はアタッシュケースを開き、赤いバツクル、ロストドライバーを腰に装着した。

「ちよつとどいてろ」

「えっ!？ちよつと、貴方何するつもりよ!？」

「いいから退いてろ」

少女達を窓から退かせ、そして『E』と書かれたメモリを取り出し、スイッチを押した。

【ETERNAL】

という電子音が鳴った。

「変身！」

俺はメモリをドライバーの右のスロットにセットして、横に倒した。

【E T E R N A L】

リズムミカルな音声が鳴り、俺の姿を変えた。

その顔は白い仮面で覆われ、頭はEを横にした三本角、∞を模したような繋がった金色の複眼、白い体に、両腕には、赤い炎が揺らめくペイントがされている。

「貴方…何者…？」

少女は恐る恐る尋ねた。

「俺は…エターナル…」

これが、竜洞カツミが死後の世界での初めての変身、仮面ライダーエターナル レッドフレアだ。

1 ETERNAL（後書き）

次回は戦闘です。

相手ドーパントは名前はドルフィンドーパントにします。

次回もお楽しみに！

感想もください！

#2 LEDFLARE（前書き）

今回は戦闘です。

レッドフレアのマキシムはオリジナルです。

W リターンズであり見せ場なかったなのでオリジナルにしました。

#2 LEDFLARE

「エターナル…？」

ゆりは首を傾げた。

エターナルは気にせず、窓から飛び降りた。

「オイオイマジかよ！？」

日向が声を上げる。

エターナルは普通に着地し、イルカの怪物、ドルフィンドーパントに向かつて、

「セイヤアツ！！」

「キュルオオ！？」

蹴り飛ばした。ドルフィンドーパントは吹き飛ばされ、林の向こうまでいった。

「あの…貴方は…」

青い髪の少女がエターナルに尋ねる。

「いいから早く逃げる。死ぬぞ。あ、この世界は死なないのか…」

「は、はい！わかりました！」

青い髪の少女はエターナルの言葉に頷き、逃げた。

エターナルはさっきのドルフィンドーパントに向かっていった。

「追っわよ、日向君！」

「お、おう！わかったゆりっぺ！」

日向と少女もエターナルを追った。

「オリヤア！」

エターナルはドルフィンドーパントにパンチを何回も与えた。

「キュクルオオオオオオオ！！！！！」

ドルフィンドーパントは強力な超音波をエターナルに放つ。エターナルは耳を塞いだ。

その間にドルフィンドーパントはエターナルに攻撃を繰り返した。

「うわぁ！」

エターナルは少し仰け反る。

「この野郎！」

今度は赤い炎を纏ったキックを食らわせた。

「こいつで終わりだ！」

エターナルはロストドライバーからエターナルメモリを抜き、右腰

に付いてるマキシマムスロットにセットした。

【ETERNAL MAXIMUM DRIVE】

電子音が鳴り響くとドルフィンドーパントは電流が走り、動きが止まる。

「ハアアアア!!」

エターナルはドルフィンドーパントに向かって走りだし、

「セイヤアアア!!」

赤い炎を纏ったパンチを回転しながら放った。

「さあ…地獄を楽しみな」

エターナルは右手をサムズダウンする。

「クキュルオオオオ!!」

その瞬間、ドルフィンドーパントは悲鳴を上げながら爆発した。

「す、すげえ…」

林から見ていた音無達は驚きの表情を浮かべていた。
爆発がおさまり、そこには制服を着た男性とメモリが一本あった。

「こいつは…」

エターナルはメモリを拾った。そのメモリはエターナルメモリとは違ってまがましい形をしている。

【DOLPHIN】

メモリから電子音が鳴った。その瞬間、ドルフィンメモリは粉々に破壊された。

エターナルはロストドライバーからエターナルメモリを取り出し、変身を解除し、カツミの姿に戻った。

「動かないで！」

カツミが振り返ると、そこには銃を構えたゆり達がいた。

「さっきのアレは何？それになんでNPCがあんな化け物に…」

「NPC？」

カツミはNPCという単語に首を傾げた。

「ここで話すのもなんだし、とりあえず本部に行こうぜ」

日向が二人の間に割って入る。

ゆりと音無も銃を下ろした。

「それもそうね。貴方にも来てもらっわよ。えーっと…」

「カツミ。竜洞カツミだ」

「じゃあ竜洞君、ついてきて」

カツミは渋々やり達についていった。

*

俺は現在、教員棟最上階にある校長室、もとい『対天使作戦本部』
に來ている。というか連行されたが正しいか？それに天使ってなん
だ？

そして目の前にはベレー帽を被ったさっきの少女、仲村ゆりが校長
の椅子に座っている。

「さて、先ずは質問よ。貴方がさっき戦っていたあの怪物はなにか
しら？」

いきなりそれが…

「俺にもわからないよ。ただ、あの怪物はドーパントって言って、
俺じゃないと倒せないってことくらいしか…」

「…そう。じゃあ、あのエターナルって言うてたのは？」

「ああ、多分こいつのおかげで変身出来たんだと思う」

そう言うて俺はエターナルメモリを見せた。

「USBメモリ…にしては大きいわね」

「ガイアメモリ…」

「え？」

「ガイアメモリ…今頭にふっと過ったんだ」

「もしかして、貴方記憶があいまいなの？」

「ああ、そうみたいだ。ただ、俺はこいつを知っている気がする」

俺はエターナルメモリを見ながら言った。
ゆりはため息をついた。

「今度はこつちから質問だ。天使ってなんだ？」

「その質問ね。この世界の仕組みは知ってるわね？」

質問を質問で返してきやがった。

「ああ、昨日会った女の子に大抵は教えてもらった。ここは死後の世界で死んだ奴が来る世界なんだろう？」

「そう。そして、授業を真面目に受けたら成仏してしまう。私達、『死んだ世界戦線』は死んでまで神様が決めた運命に縛られたくなくて、抗っているの」

要するにレジスタンスみたいな奴らの集まりか…なんか面白そうだな。

「で、その障害になる天使、昨日貴方が会った女の子、この学園の生徒会長。それが天使！」

…奏が天使？

どういうことだ？

「で、聞くけど、貴方、入隊しない？」

「何に？」

「私達、『死んだ世界戦線』によ」

……勧誘か？そいつは。

「貴方、さつき面白そうって顔してたし、それに、貴方の力は私達戦線にとっても必要だと思うの。入りなさいよ。というか入れ」

いつのまにか命令形になってるぞ！

「それに…あの怪物がまた出るかもしれない。その時は貴方の力が必要なの」

「……確かにな。…わかった。俺も確かに神様の運命に従う気は無いしな」

「じゃあ！」

「ああ、入ってやるよ。お前の戦線に」

そう言っただけで俺とゆりは握手をする。

「よろしく、竜洞君。私以外に戦線メンバーはいるんだけど、今はみんな出払ってるから、集まった時に紹介するわ」

「ああ、わかった」

そう言っただけは、校長室を後にした。

*

薄暗い場所に一人の男がパソコンの画面を見ていた。それはエターナルがドルフィンドーパントを倒す場面だった。

男は目薬を取り出し、差した。

男は目薬が強かったのか、小さくうめき声を上げた。

「まさか…変身している奴は違うが、また私の箱庭を汚すか…エターナル」

男の手にはメモリがあった。

男はメモリのスイッチを押した。

【EYES】

#2 LEDFLARE（後書き）

次回は出来れば原作に入りたいです。

次回もお楽しみに！

感想待ってます！

#3 MY SONG PART 1 (前書き)

主人公のイメージモデル。

櫛トシキ(カードファイト！ ヴァンガード)

ICV：佐藤拓也

リュウガ同様また櫛トシキがモデルになってしまいました。髪型は黒髪に赤いメッシュがあります。

今回は戦闘全くありません。

今回は戦線メンバー紹介とかですね。

入江ってこんなキャラだったっけ？

と思いながら書いていました。

#3 MY SONG PART 1

翌日。校長室。

俺はゆりに呼び付けられた。

着くとそこには個性的な奴らがいた。

この前俺を連行しようとした二人に加えて、体格がよさそうな大柄の男性、ハルバートを持った男性や、長ドスを持ったチンピラみたいな男に、気弱そうな男性に、眼鏡をやたら持ち上げる男、外人っぽいバンダナの男やギターを持った女に、部屋の隅で腕を組んでる女性だったり、個性的過ぎだろ…

「彼が、新しく入った？」

「ええ、そうよ。竜洞君、自己紹介よろしく」

ゆりが現在周りを見渡している俺に言ってくる。

「わかった。えーっと…竜洞カツミだ。これからこの戦線に入ることになった。よろしく」

俺は普通に自己紹介した。

そこにギターを持った女が近づいてきた。

「昨日は入江が世話になった。私は岩沢。よろしく、竜洞」

「ああ。っていうか入江って…」

「貴方が昨日あの化け物から助けた女の子よ」

あー。確かいたな。そんな奴。

「いや、あん時は偶然だ」

「それでも、ありがとう」

岩沢は感謝の言葉を言ってきた。
なぜだろう。それを聞くと…誰かを思い出してしまう…ピンク色の髪に、金色の瞳をした女の子を…

「とりあえず他の戦線メンバーを紹介するわ。そこにいる青い髪をした彼は日向君。見た目通りちゃんぽらんだけど、やる時はやるのよ」

「ゆりっぺ、それ音無の時と同じでフォローになってないぜ…」

次に体格がよさそうな大柄の男性。

「彼は松下君。柔道五段だから、皆敬意を込めて松下五段と呼んでいるわ」

「よろしくな、竜洞」

「ああ」

そうやって俺と松下五段は握手を交わす。
次に気弱そうな男性。

「彼は大山君。特徴がないのが特徴よ」

「それ特徴って言わないだろ…」

「ようこそ、戦線へ」

「あ、ああ」

大山とも握手を交わす。

「Come on! Let's dance!」

バンダナをした外人っぽい男性が俺を見ている。

「いきなりなんだ？」

「この人なりの挨拶よ。皆TKって呼んでいるわ。本名は誰も知らない謎の男よ」

「行動そのものも謎だな」

変な奴がいつぱいだな…

「眼鏡を持ち上げて知的に話するのが高松君。本当はバカよ」

「よろしく」

高松が眼鏡を上げながら答える。

「あとその長ドス持つてるチンピラみたいなのが藤巻君」

「藤巻だ」

藤巻は笑みを浮かべながら言ってきた。

「そのハルバートを携えてるのが野田君。んで、部屋の隅で「浅はかなり」って言うてるのが椎名さん。あと、そこにいる彼女が陽動部隊のリーダー、岩沢さん」

「ふっ…」

「浅はかなり」

「改めてよろしく」

野田は俺を一度睨んで、椎名は浅はかなりと言い、岩沢は俺と握手を交わす。

「そして、日向君の隣にるのが音無君。最近入ってきて、貴方と同じで記憶が無いの」

「昨日は悪いな。同じ記憶ない奴同士仲良くしてくれ」

「ああ、こちらこそよろしく。音無」

俺と音無は握手を交わす。

そこにゆりが俺にみんなが着ている制服を渡してきた。

「貴方も今日から戦線メンバーなんだから、これ」

「おお、サンキュー。早速着替えてくる」

そうやって俺は一度校長室を出た。

＊

俺は空き教室で戦線の制服に着替えている。

あの時、岩沢に感謝された時現れた、あの子は…一体…

俺は着替えを終えて、再び校長室に向かった。

＊

校長室に入ると、岩沢がギターを弾きながら歌を歌っていた。

バラード調の曲が響き渡る。

戦線メンバーはそれに聞き入っている。

……いい曲だな。

「おっ来たか、竜洞」

「ああ、岩沢いい曲出すな」

俺と日向は小声で話す。

「何故新曲がバード？」

ゆりは校長の椅子に座りながら岩沢に尋ねる。

「いけない？」

「陽動にはね」

ゆりが答える。

「なあ…その陽動つてのは何なんだ？」

音無が声をあげて尋ねる。俺もそれは気になっていた。

「トルネードの時に聞いてなかった？あつ、竜洞君は知らないか…
彼女は校内でロックバンドを組んでいて生徒の人気を勝ち得ている。
私達は直接彼らに危害は加えないけど、時には利用したり、妨げに
なるときはその場から排除しなくてはならない。そういう時、彼女
達は陽動をするわ」

「NPCのクセにミスターな奴らだな」

「なあ…前から思ってたんだが、そのNPCってなんだ？」

「なんだ貴様、そんな事も知らんのか？」

野田が俺に挑発するかのように言ってきた。
なんか腹立つな…

「そういえば聞かれたのに言っでなかったわね。NPCっていうのはNon Player Character。この世界に最初から住んでいる模範って奴よ」

「へー」

つまり、俺達とは違って、神に抗わない連中のことか…？

「……で、ダメなの？」

「……うーん…バラードはちょっとね。しんみり聴き入っちゃったら、私達が派手に立ち振舞えないじゃない」

ゆりから聞くと、岩沢は残念そうにギターをケースにしまう。

「そう…じゃあボツね」

俺はいいと思うのだが…

「気を取り直して、総員に通達する。音無君、カーテン閉めて」

「あ、ああ」

音無はゆりの言葉に頷いて、カーテンを閉めた。

校長室が暗くなり、ゆりの後ろのスクリーンが展開された。

「今回のオペレーションは、天使エリア侵入作戦のリベンジを行う。決行は三日後」

他のメンバーは歓声を上げたが、俺と音無は首を傾げた。
なんだ？その作戦…

「ですが…前回の作戦では…」

高松が意見を言う。

俺はそのオペレーションについて説明して欲しいものだ。

「今回は…彼が作戦に同行する」

「よろしく」

ゆりの後ろから現れたのは眼鏡をかけた少年だった。
いつの間にそこにいたんだ…？

「椅子の後ろから！？」

「眼鏡かぶり…」

大山は声をあげて、高松は眼鏡を持ち上げながら言った。
高松…何対抗意識燃やしてんだよ。

「ゆりっぺ、何の冗談だ？」

野田がゆりに尋ねる。

「そんな青瓢箪が使い物になるのかよ？」

喧嘩腰の藤巻。

「まあまあ、そう言わないで」

ゆりの言葉を言い終わらないうちに眼鏡の少年は俺達の前に立つ。

「はっ！なら…試してやろう！」

野田は持つてるハルバートを眼鏡の少年に突き付けた。

「お前、友達いないだろ？」

「絶対いねえだろうな…」

俺と音無はさりげなく言った。

だが、眼鏡の少年は気にも留めずに口を開く。

「3・141592653589432………」

「や、やめろおおおお！！！！やめてくれええええ！！！」

眼鏡の少年の言葉に野田が苦しみ始めた。っていつか…

「まさか！？円周率だとお！？」

「眼鏡かぶり！」

「やめてあげて！！その人はアホなんだ！！！」

「ってか円周率で苦しむとか…どんだけアホなんだよ！？」

「そう…私達の弱点はアホな事！」

「リーダーが言っなよ」「」

俺と音無は同時に突っ込んだ。

「前回の作戦では我々の頭脳のいたるなさを露呈してしまった…しかし！今回は天才ハッカーの名を欲しいままにした彼！ハンドルネーム竹山君を作戦チームに登用。エリアの捜査を綿密に行う！」

「「……………今のは本名なんじゃ（なのでは）？」」「」

絶対これはハンドルネームじゃなくて本名だろ…
そんなこと思っていると竹山は俺達に指を突き付け、

「僕のことは…クライストとお呼びください」

かつこよく言っ たつもりだろうが、ゆりのせいで台無しだよ…

俺はこの時思った。

こんな戦線で大丈夫か…？
いや、大丈夫じゃないな。

*

俺はゆりからの説明を聞き終え、校舎を歩いていた。

初参加だが、俺は岩沢達のところの陽動部隊に行けとのことだ。

天使、すなわち奏が現れたら、エターナルで戦ってくれとのことだ。
正直使いたくないな。

歩いていると、ギターの音とかが聞こえてきた。

空き教室だ。そこから岩沢ともう一人が出てきた。

「あ、竜洞」

「よっ。そっちは…」

「あ、え、えっと…」

岩沢の隣にいる青い髪の子はおどおどしている。
もしかして…

「お前が岩沢の言ってた、入江か？」

「は、はい！岩沢さんから聞きました！昨日はありがとうございま
したー！」

入江は顔を赤くしながら頭を下げた。

「いいよ。んなことなくて、俺はただ助けただけだから」

「でも、貴方が来なかったら、私今ごろ…」

「っていうかこの世界は死なないんだから、大丈夫だろ？」

「あ、そ、そういえば」

入江はてへへという感じの笑顔で言った。

「あゝ、なんかあたし邪魔みたいだから向こう行ってるわ」

そう言っで、岩沢は向こうに行ってしまった。

「え、えつと…今度のライブの時、もしかた化け物が現れたら…」

「わかってる。その時はお前らを必ず守る」

もちろんそのつもりだ。

奏には無理かもしれないが、ドーパントなら容赦はするつもりはない。

この子の笑顔を、守るためにも…

#3 MY SONG PART 1 (後書き)

次回は戦闘あります。

敵は二択で迷っています。

アノマロカリスかコックローチで迷っています。

うーんどっちにするか迷うZE！

そしてカツミの思い出した女の子は、ある作品のキャラクターです。
多分分かる人は分かると思います。

次回もお楽しみに！

感想も待ってます！

#4 MY SONG PART 2 (前書き)

今回は戦闘あり！

前回カツミが思い出してきた少女はあるサンデーの漫画のキャラクターです。

サンデーで人気のあのキャラです。

4 M Y S O N G P A R T 2

入江との話を終えて、俺は再び校舎を歩いていた。

自販機で買った『KEY コーヒー』を飲んでいると、

「この位見逃せよ、生徒会長！」

近くの掲示板の方でそんな声が聞こえてきた。

生徒会長ってことは……奏か？

俺は声のする方に歩みを進めた。

「そうよ！ガルデモのライブは私達にとっての唯一の楽しみなのよ！？」

「それを奪うな！」

N P C が奏に抗議の声をあげていた。

奏は何も言わずにガルデモのポスターを一枚はがして去っていった。

「まるで悪役ね……」

「確かにな」

ポツリと呟いた奏に、俺が返事をする、奏は少し驚きながら俺の方を見た。

「久しぶり、って言っても一昨日振りか。やっぱり、ライブに行くのか？」

「ええ、校則違反だから」

「そうか。生徒会長も大変だな……」

「……あなたは戦線に入ってるの？」

奏は唐突に俺に尋ねてきた。

「……ああ、昨日入った」

「あなたはなんで戦線に入ってるの？」

「それは……自分が何なのかも知らずに消えるのはごめんだから……かな？」

そう……俺は知りたい。自分がなんでガイアメモリとかドーパントとか、エターナルのことを知っているのかを。
そしてあの時、頭に入ってきた女の子のことを……。

「そう……」

奏は一言だけ言うとそのまま去っていった。
その時の彼女は、悲しそうな表情だった。

*

天使エリア侵入作戦当日。

俺はもしもの時の為にガルデモのライブ会場の舞台袖で待機している。

少しすると、会場から活気の声が響いていた。
始まったな。

俺も少し見させてもらうか。

*

ガルデモの会場に向けて数人のNPCの教員が歩みを進めていた。

「くそっ！今まで見逃しておいたらつけあがりおって！」

体育教師らしき人物が悪態をついた。
すると彼等の前に、一人の男が現れた。

「こ、これは理事長！」

理事長と呼ばれて男は体育教師の前まで歩き、一本のメモリを差し出した。

それには大きく『A』と書かれていた。

「これは…？」

「それはもしも彼らが抵抗した時に使いたまえ」

「わ、わかりました」

そう言つて教員達はライブ会場まで再び歩を進めた。

理事長と呼ばれた男は目薬を取り出し差した。

「むううう…！君達はエターナルの実力を知る為の実験台になつてもらうよ。憐れな箱庭の人形達…」

*

ガルデモのライブは先ほどまで生徒達はあまり少なかったが、途中から少しずつ生徒達が入口から入ってくる。

「スゲーな…」

「そうです。これが岩沢さんの実力です」

突然の背後からの声で俺は振り向くと、そこには陽動部隊の一人の遊佐がいた。

「お、驚かすなよ！」

俺はつい声を上げた。だが、会場にはあまり響かない程度の音量だ。だが、遊佐はそれ以上何も言わずに舞台袖から観客の方を見る。

観客からはものすごい熱気が湧いてきている。
音無達…うまくやってんだろうな？
俺が岩沢や入江を見ながらそう思っている…

「こら！お前達！！何をしている！？」

教師達が、体育館に入ってきたのだ。
ちっ…思ってたより早い…！

「嫌だよ！ぜってー見てえもん！」

「そつよ！お前らこそ帰れ！」

「そつだそつだ！」

観客達が教師を止めてくれた。

音無が言ってた通り、NPCなのに、ミィハーな奴らだな…でも安心した。

だが、教師達の後ろから天使、奏が入ってきた。

「天使、出現しました」

*

「了解」

ゆり達は陽動班を囫に、天使エリア…すなわち、女子寮の奏の部屋に侵入していた。

ゆりは遊佐からの報告を受け、奏のパソコンにハッキングを仕掛けている竹山に指示を出した。

「竹山君」

「今、パスワードを高速で割り出すプログラムを走らせてます。すぐ終わります…あと、僕のことはクライストとお呼びください。—入りました！」

竹山がパソコンのパスワードを割り出しに成功した。

「よくやったわ竹山君！全てのデータを移して！」

「時間がかかりすぎます。一時間は必要です。あと、僕のことにはクライストと…」

「だったらハードディスクごと引っこ抜くか！？」

二人の間に日向が割って入ってきた。

「ばれるじゃない…」

「じゃあどうする？」

「とにかく、怪しいデータを見せて、竹山君！」

「クライストです」

竹山はゆりと日向に挟まれながらもそう言ってエンターキーを押した。

出てきたのはたくさん名前とクラス。

「学生リスト？」

「NPC…いや、私達も混ざってるか…教師まで…」

「単なる名簿だろ！？怪しいデータなんてどこにもねえ！やっぱりただの犯罪行為じゃねえか…」

「黙れ！」

音無が怒鳴っていたが、野田により黙らされた。

『陽動班、取り押さえられました。天使が戻ります』

「ちっ、ここまでね」

「今回も得るもの無しか…」

ゆりが退散の指示を出そうとパソコンの画面から目を離そうとした時、

「っ！竹山君！今の教師リストの所、少し戻って！」

「どうしたんですか？あと、僕のこととはクライストと…」

「いいから！」

竹山が画面を操作し、スクロールしながら戻って行くとその名前はあった。

【理事長 プロスペクト】

*

「離してあげて！」

「俺達の為なんだよ！」

捕まったガルデメンバーを見て、NPCの生徒達が騒ぎだす。それに対して体育教師が声を張り上げた。

「今までは大目に見てやってただけだ！頭に乗るなっ！」

体育教師はそう言いながら、岩沢のギターを掴む。

「これは捨ててもかまわないな？」

「…触るな」

「なに？」

岩沢の言葉に、体育教師は顔をしかめた。

「……それに…触るなあ！」

岩沢は叫びながらギターを持った教師に体当たりをし、体育教師からギターを奪い取る。

それに合わせ、ひさ子も教師を振り払いステージ裏へと向かう。教師が追いかけるが、押さえられていた遊佐が教師の足を掴んでそれを邪魔する。

岩沢は体育教師に壁際に追い詰められていく…

俺はその教師にタックルをし、ステージから突き落とす。

「お前…」

「弾けよ」

「え…？」

「歌えよ。あの時の曲。途中からだっただけど…いい曲だったからさ。皆に聞かせてやれよ」

「竜洞…」

俺は背中越しに岩沢に言った。

体育教師は鬼の形相で立ち上がり、一本のメモリを取り出した。

まさか…

「調子に乗るなあ！」

【ANOMAROCARIS】

体育教師がメモリを左腕に差し込むと、体育教師は古代生物のアノマロカリスを彷彿させる怪人、アノマロカリス・ドーパントに変わった。

「岩沢。俺はアレをやってくる。お前はお前のやりたい事をやれ」

「……………わかった」

岩沢の頷きを聞き、俺はロストドライバーを腰に装着し、エターナルメモリを取り出す。

【ETERNAL】

「変身！」

【ETERNAL】

俺はエターナルに変身した。

そのまま俺はアノマロカリス・ドーパントを外に連れ出した。

「こつちだ。化け物教師！」

『キユオオオオオオ！！』

俺の挑発を聞いたのか、アノマロカリス・ドーパントは俺についてきた。

そうだ。それでいい。

*

カツミがいなくなり、先ほどのアノマロカリス・ドーパントで騒ぎだすNPC生徒達を見ながら、岩沢はギターの弦を弾く。

その音はスピーカーを通じ学校全体に響き渡った。

その演奏が始まると、先ほどまで騒いでいた生徒達が岩沢の歌に聞き入る。

*

エターナルはアノマロカリス・ドーパントを外に出し、戦闘を開始する。

「さあ始めるぞ…死神の鎮魂曲だ」

エターナルはそう言いながら、赤い炎を纏ったキックをアノマロカリス・ドーパントに与えた。

アノマロカリス・ドーパントは少し吹き飛ぶ。

『キユオオオオオ！！』

アノマロカリス・ドーパントは雄叫びを上げながら、口から無数の歯の弾丸を飛ばしてきた。

エターナルはその攻撃をもろに受ける。

「ガハッ……！」

エターナルは苦しみながらも立ち上がる。

その時、アノマロカリス・ドーパントに弾丸が浴びせられる。

「大丈夫か、竜洞！？」

「日向…音無！？」

日向や音無達が銃を構えながら来た。

「みんな、あの怪物に集中攻撃！間違っても竜洞君に当てないことよ！」

ゆりも銃を構えながら指示を出す。

「みんな…」

「お前に任せっぱなしってのも胸くそ悪いしな。安心しろよ」

「日向…お前まさかコレなのか？」

「ちげえよ！いいからとつと止め刺してこい！」

日向の言葉で、エターナルは怯んでいるアノマロカリス・ドーパントに向かって走りだし、パンチを食らわせた。

そして、エターナルメモリをマキシマムスロットに挿入する。

【ETERNAL MAXIMUM DRIVE】

その瞬間アノマロカリス・ドーパントは苦しみだす。エターナルはアノマロカリス・ドーパントに向かって駆ける。

「セイヤアア！！」

エターナルは回転しながら赤い炎を纏ったパンチをアノマロカリス・ドーパントに放った。

「さあ…地獄を楽しみな」

エターナルは右手をサムズダウンする。

その瞬間、アノマロカリス・ドーパントは爆発し、そこには倒れた体育教師と砕けたメモリが残った。

「退散よ！天使がくる前に撤収！」

ゆりはみんなに指示をだし、ここから離れた。

エターナルも変身を解除し、カツミの姿に戻る。

（岩沢…大丈夫だろうか？）

カツミは岩沢を心配しながらゆり達についていった。

*

岩沢が消えた。

入江からの言葉に俺は言葉を詰ませた。

あいつが…消えた？

「どういうことだよ？」

「……岩沢さんが、あの新曲を弾き終わった瞬間に消えたんです…」

顔を俯かせながら、沈んだ表情で入江は言った。

あいつ…自分のしたかったことをして消えたのか…

岩沢にとっては、満足だったんだろうな…

「どうするつもりなんだ？ボーカル」

「それは多分代わりを探すしかないと思います」

そうだよな。

「わかった。ありがとう入江」

「はい、それとありがとうございます！」

入江は頭を下げながら言った。

俺はそれを確認して、自分の部屋に入って、ベッドに寝そべった。

「俺も…満足したら、消えちまうのかな…？」

俺は自分に言いながら目を閉じた。

＊

夢を見た。

そこには小さい頃の俺らしき人物が、木の上で涙目になりながら木に掴まっている女の子を見ている。

その女の子は前に見たピンク色の髪で金色の瞳をした少女だった。

『大丈夫だよ、——ちゃん！俺が受けとめてあげるから！』

『ぐすつ…本当？』

『本当だよ！さあ、——ちゃん！』

何故か彼女の名前が聞き取れなかった。
一体あの子は…

『ありがとう、カツミ君…』

その感謝の言葉が響いた。

君は………——………

#4 MY SONG PART 2 (後書き)

今回は野球の話をするか、飛ばして5話をするか迷っています。
できれば感想にどちらがいいか入れてください。

次回もお楽しみに！

感想もお願いします！

5 Day Game Part 1 (前書き)

今回の話、戦闘をどう入れればいいか迷っている。
つとうか野球の話で戦闘入れるとか無理じゃね？

5 Day Game Part 1

岩沢が消えて数日経った。

俺達は校長室に集まっていた。そして一人の少女を凝視していた。ピンクの髪をしていて、戦線の制服を着ているが、おかしい部分が多い。特に尻尾があったり。

「こいつが岩沢の代わりだと？」

「ありえねえ……」

「ユイって言います！よろしく願いします！」

ユイは元気よく挨拶し、気のせいか が現れたような気がした。

「誰？こいつ」

「お前聞いてなかったのか？ガルドモのニューボーカル候補だよ」

日向のやつ…何ボーツとしてたんだ？

高松が眼鏡をあげながら口を開く。

「いいですか？ガールズ・デッド・モンスターはロックバンドですよ？アイドルユニットにでもするつもりですか？」

「いや、ちゃんと歌えますから！どうか聴いてから判断してください！」

そう言ってユイはギターやらの一式を用意してきた。

「形だけは様になってるな」

ああ、確かに形だけはな。

そうしていると、ユイは歌い始めた。

聞いてみると岩沢にも負けず劣らずの歌唱力で結構うまい。
でも、

「イエーイ！みんなー！今日は来てくれてありがとうー！！イエーぐはっ！？」

調子に乗っていた感じらしいのか、何故か宙吊り状態になってしまっている。

……バカだな。

しかも地に足がギリギリのところぞつかないラインだ。

「何かのパフォーマンスですか？」

「デスメタルだったのか…」

「C r a g g y B a b y」

「し、死ぬ……」

「いや、事故みたいだぞ？」

俺達はとりあえず首吊り死体になりかけたユイを降ろした。

「とんでもないお転婆娘ね。クールビューティーだった岩沢さんとは真逆ね…」

「ガールズ・デッド・モンスターのリードボーカルとしてはいいかなものかと……」

「別のヤツを探すか」

「コラァー！ちゃんと歌えてただろ！それでも岩沢さんの大ファンで、全曲歌えるんだからな！！」

ユイが怒鳴りながら言う。確かに歌は悪くない。でもコイツがリーダーか……

「心に訴えるものがなかったなあ」

「ありませんね」

「ねえな」

「確かにコイツがリーダーつても……なあ？」

「くおらああああ！！そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるなあああ！！それでもお前ら先輩か！？」

「うるさい奴だな」

「すでに言動に難ありだぞ？」

「どつするの？」

「やる気だけはありそうね」

「単にミーパーなだけだぜ」

確かに。ユイを見ると、色々なものが胸の辺りに突き刺さっている。

言葉の暴力ってヤツか？

「はあ… バンドがこんなじゃ、球技大会で大々的な作戦は行えないわね」

「球技大会？ そんなものがあるのか？」

「そりゃあるわよ、普通の学校なんだから」

「確かに、死後の世界ってこと以外は普通の学校だよな…」

「おとなしく見学か」

「もちろん参加するわよ」

「学校行事に参加したら消えるんじゃないのか？」

「もちろんゲリラ参加よ。いい？ あなた達それぞれメンバーを集めてチームを作りなさい。一般生徒にも劣る成績を収めたチームには… 死よりも恐ろしい罰ゲームね？」

笑顔でゆりはそう言いやがった。

怖え…… その笑顔が怖え……

*

さて。誰とチーム組もうか…

そんなことを考えていると、日向が俺の肩に手をかけてきた。

「竜洞。俺にはお前が必要だ」

「俺にはそんな趣味は無い」

「違いよ！チームの話だよ！ゆりっぺは本気だ。……負けたらえらいことになる」なるほど…ま、俺もみんなが驚くくらいの罰ゲームは受けたくはないな。

「別に構わないが、他のメンバーのあてはあるのか？」

「ふふん、任せろ。人望で生き抜いてきたような人間だ。最強のチームを作ってやるぜ！」

……大丈夫なのか？

そのあと、音無も加わった。

さて。こいつは一体誰を誘う気だ？

「ええ！？もう高松と組んじゃったの！？」

「うん」

一人目のひさ子はすでに高松に勧誘されたか。

「訳分かんねえぜ！何で待ってくんねえの！？」

「別にあんたの誘いを待っている方が訳分かんないわよ。それに高松の方が信用できるし」

とだけ言うとしさ子は俺達から離れていった。

「あいつ運動神経抜群なのに……」

「素晴らしい人望だな」

「ああ、本当に素晴らしい人望（笑）だな」

「仕方がない。ちつとばかり卑怯だがリーダー格の松下五段をメンバーに誘おう」

松下五段か…… あんな腕っぷし強そうなのみんな狙ってるだろ。

「もう取られてるだろ？」

「だよなあ……」

「あいつは待っててくれるよ。なんつーか、マブダチなんだ…照れるな、あつはは」

大した自信だな。けど松下五段だから絶対他の奴らに取られてるな。

「俺、別行動する。他の奴らかき集めてくる」

「お、おお。強そうなの頼むぞー！」

俺はそう言って日向達と離れた。

*

とりあえず真っ先に思い浮かんだ人物の所に向かった。

「よう。入江」

「えっ！？り、竜洞さん！？」

ガルデモメンバーの入江である。

こいつとはガルデモの中で一番話すからな。

俺は今までの経緯を入江に説明した。

「それで私を球技大会のメンバーにですか？」

「ああ」

「けどいいんですか？私、運動とかあまりやったこと無いし……」

入江は顔を俯かせながら言った。

「大丈夫だ。俺を信じろ」

俺は微笑みながら入江に言った。
すると入江は顔を赤らめた。
なぜだ？

「は、はい！私、頑張ります！」

「おし！そうこなくちな」

「あ。でも待つてください。もう一人連れてきます」

そう言つて入江は少し違う所へと走っていった。

しばらくすると、入江は同じガルデメンバーの関根を連れてきた。

「話はみゆきちからきました！竜洞さんとみゆきちのためにもここは私が人肌脱ぎます！」

関根は胸を張りながら言った。
いや、チームのための方がいいと思うぞ。

「おう！頼むぜ、入江、関根」

さて、そろそろ日向達の所に行くか。

*

俺と入江、そして関根は音無達と合流した。

「よ。そっちはどうだ？」

「ああ、竜洞か。見てのとおりだ」

音無達の後ろを見ると、そこにはユイ、椎名、野田がいた。

「おいおい、大丈夫かよ。これで…」

特にユイが…

「お前だつて似たようなもんだろ」

確かにな…

「そう言えば、競技は何なんだ？」

「野球だよ」

「んじゃあこれで揃ったな」

「そうだな」

こうして俺達の野球メンバーは揃った。

果たして球技大会をこのメンバーで生き抜けるのか？

……何故か不安しか感じない。

#5 Day Game Part 1 (後書き)

次回、戦闘入れればいいかわからない……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3104w/>

仮面ライダーエターナル《死後の世界の赤き永遠》

2011年11月14日22時48分発行